

### 特集「近世日本における〈北方〉イメージ」 について：奥州の狂歌人の季節感：規範を 超えて雪を詠む

KOBAYASHI, Fumiko / 小林, ふみ子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

101

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

2019-03-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021869>

# 奥州の狂歌人の季節感

## —規範を超えて雪を詠む

小林 ふみ子

### はじめに

日本列島は、近世日本で普及した地図ではたびたび東西に長い島として描かれたが、当然ながら実態としては南北にも広がり、大きな気候の差がある。鈴木牧之『北越雪譜』初編が上梓され、江戸からは想像もつかない雪国の世界が広く知られるようになったのは天保7(1836)年のことであった。とはいえ、それ以前から、北国に生きる当事者たち、なかでも関東以西の地域と往来のあった人びとは、その違いを認識していたことであろう。

近世日本において津々浦々までもっとも広く浸透した文芸は俳諧であったが、その世界では歳時記によって厳密に季節の景物が規定されていた。北のくにの人びとがそれをどう感じていたのかというのは興味深い論点であろう。が、本稿で注目するのはその俳諧に次いで近世後期の日本で広く楽しまれ、とくに江戸を中心として愛好者の組織化が進んだ狂歌である。この国の季節感の規範を作った和歌の作法を参照しながらも比較的に自由さのあった狂歌の世界に遊んだ奥州のうた人たちが、京都の暦に合わせた感覚の伝統にどう向きあったのかを探ることを課題とする。

筆者の手もとには、陸奥の入口とされた白河の狂歌人、秋風<sup>あきかぜ</sup>関住<sup>のせきずみ</sup>が、さまざまな狂歌判者による狂歌合に投稿した狂詠の控えをまとめた文化10(1813)年の稿本がある。六樹園<sup>ろくじゆえん</sup>飯盛<sup>めしもり</sup>こと石川<sup>まさもち</sup>雅望編『狂歌画像作者部類』(文化8・1811年刊)によれば通称を奥村屋繁藏、別号紅葉舎という、とりたてて有名ではない一狂歌人である<sup>1</sup>。かの「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白川

<sup>1</sup> 牧野悟資氏のご教示によれば、関住はこの前年文化7年の六樹園の月並集『堀川次郎百首題狂歌集』に2首みえるのが初出という。

の関」(能因法師・『後拾遺和歌集』)による素朴な狂名ながら、あるいは実際に関所跡の近くに住まいしたのかもしれない。六樹園の編による同年刊の『自讃狂歌集』にみえるその肖像からすると、町人であったとみられる。その狂歌投稿綴に「名所花」と題して次のような一首がみえる。

みちのくといへどもみちのくにならで花にたのしきしら川のせき

陸奥、道の奥などと言われるけれども、けっして「未知」の国ではなく——狂歌では漢語の使用も厭わない——、わが白河は桜も咲いて楽しい土地なのだ、と素朴に「陸奥」の含意に反発する。判者 浅松庵せんしょうあんの3月の月並狂歌会に投稿し、7点であったことも併記する。15点満点でこの評価は高いものではない。再度この歌を10名の判者の合評による「関路花」の題詠の狂歌会に出したことも別の丁に記すが、そのときの評価も詳細もよくわからない。江戸の判者には、この発想も技巧もとるに足りないものと映ったのであろうか。

また千柳亭唐丸せんりゅうていからまること仙台藩の医官錦織即休が狂歌判者として陸奥の歌人百名の作を集めた『狂歌陸奥百歌撰』きょうかみちのくひやくかせん(文政2・1819年刊)には<sup>2</sup>、こんな歌を取めた人がいた。

こよみなき山家と春は卑下されず彼岸桜に種まきさくら 友垣中澄

同書には巻末に作者の一覧があり、それによれば仙台近く、小鶴の「郷家竹蔵」というから当地の豪農であろうか。伝統的な歌の世界では暦という文明の届かない山家という詠まれかたをするが、春には折おりを告げる桜で季節の移ろいがわかるのだから卑下できないのだという。これも戯れのかたちをとりつつ、田舎を蔑む王朝の価値観に異を唱えてみせることばであった。

俳諧の世界では、幕末まで4,000～5,000部は出されたというかの芭蕉の『おくのほそ道』(元禄15・1702年刊)の圧倒的影響力によって<sup>3</sup>、漂泊するにふさわしい辺境の地としての陸奥像が定着していた。実際にはその旅の当時すでに、芭蕉や『日本行脚文集』にほんあんぎやふんしゅう(元禄3年刊)の三千風みちかぜといった人びとを迎えられるだけの俳人たちが当地にいて十分にひらけていたにもかかわらず<sup>4</sup>、幕末ま

2 高橋章則編『東北文化資料叢書第五集 近世文学資料』(2010年)に翻刻・解題が備わる。

3 雲英末雄『俳書の話』(青裳堂書店、1989年)15頁。

4 谷地快一「のちのほそ道—雲裡坊と蕪村」(『国文学』52巻4号、2007年)100頁指摘。なお、当地の俳壇については井上隆明『東北・北海道俳諧史の研究』(新典社、2003年)に詳しい。

で約 80 を数えるほどに簇生した追隨者たちによって、その辺土としての印象が再生産されつづけていた<sup>5</sup>。さきの狂歌 2 首はそうした視線へのささやかな反論であったのかもしれない。

本稿では、これらほど明確な表現ならずとも、狂歌において奥州の人びとが季節感など伝統的な和歌の規範から逸脱する独自性を表明したところがあったのかを探究してみたい。

## 一 奥州の江戸狂歌

本題に入る前に、狂歌が奥州でどのように広まっていたのかを概観しておく<sup>6</sup>。18 世紀後半の江戸では、狂歌が武士・町人の身分を超えて大流行し、判者などと呼ばれ指導者ごとに、また地域などのつながりによって愛好者がまとまって、さまざまな狂歌会が開かれるようになる。そうした会は実際に対面で行われるだけでなく、事前に公表された月ごとの題に対して多くの狂歌人たちが歌を作って応募し、それに主催者が選んだ判者が点数を付けて高ポイント歌を出版する、大会のような形式の会「狂歌合」が発達してゆく<sup>7</sup>。その発展と並行して、狂歌壇では、江戸と国元を往来した武士たちや商人らからはじまって、地方からの参加者もしだいに増えてゆく<sup>8</sup>。寛政期(1789-1801)には、「連」のちに文化初年頃から江戸座俳諧に倣って「<sup>がわ</sup>側」とも称した各グループが正月に向けて編んだ春興狂歌集に、今でいう関東甲信越、東海および東北地方を中心に、西日本も含め、各地の地名を冠した狂歌人たちが少なからず確認できるようにになる。それはまもなく地域ごとにまとまって掲載されるようになっていく。

- 
- 5 谷地快一「『おくのほそ道』の追隨者たち」(『与謝蕪村の俳景』新典社、2005年、457—479頁)。
  - 6 『江戸の転勤族 代官所手代の世界』(平凡社、2007年)をはじめとする高橋章則氏による一連の研究がある。
  - 7 拙稿「狂歌角力の発達」(『天明狂歌研究』汲古書院、2009年、35—57頁)、最盛期の制度については丸山一彦「狂歌合にみる地方と中央の交流 - 文政期の資料を通して」(『文学』46巻8号、1978年、64—72頁)。
  - 8 石川了「江戸狂歌の地方伝播」(『江戸狂歌壇史の研究』汲古書院、2011年、319—336頁)。

例えば浅草を拠点として一大グループを作った浅草市人らの寛政9（1797）年の春興『柳の糸』あたりでは、はっきりと地域別に並べられるようになり、奥州でいえば岩城・白川・三春・阿武隈川に計8名がみえる。注目すべきは同連中が翌10年に出した春興『男踏歌』<sup>おとことうか</sup>で、同じ連中の狂歌人だけでなく、江戸を拠点とする他のさまざまな狂歌連の各地の成員、また上方狂歌界の諸派の狂歌人、さらには狂詩で名をとどろかせた銅脈先生<sup>どうみやく</sup>の詩句までも集めていた。入集者は約600を数え、そのうち半数強をその連中の狂歌人が占めるなか、奥州勢は連中に三春を最多として31名の詠が載り、その他客分として21名。合計すると奥州の狂歌人が全体の1割近くを占めるほどになっている。

これはたんに当地に狂歌の愛好者が多かったというだけではない。喜多川歌麿ほか、名だたる浮世絵師の色摺り挿絵に彩られ、厚手の奉書紙で格調高く画帖装に仕立てられたこの集に一首を載せることがまず多額の参加費を要したに違いない。つまりそれだけの費用をまかなうことができる富裕層が、この地域にいたということである。

奥州でははやく寛政4年には江戸から代官として桑折に赴任した感和亭鬼武<sup>かんわていおにたけ</sup>によって同地の人びとの狂歌集が編まれていたが<sup>9</sup>、さらに桑折では同10年には当地の中心人物上水亭下見<sup>じょうすいていしたみ</sup>が42の厄年を迎え、山東京伝の助力によって多数の江戸の狂歌関係者も詠をよせる小冊子『靈寿杖』を出すに至る<sup>10</sup>。ここには総勢80を超える陸奥各地の狂歌人の名がみえる。

寛政末頃に当時の狂歌壇最大勢力であった四方連の判者山陽堂山陽<sup>さんようどうさんよう</sup>が出した「狂歌年代記」には<sup>11</sup>、日本図を「四方連全図」と称し、当時人口に膾炙していた海なき国を知る歌「海なきは山城大和伊賀河内」云々をもじって、このような一首が掲げられていた。

連なきはゑぞ琉球に釜山海硫黄が島に女護韓唐<sup>にようごがんどう</sup>

自派の全国的拡大を誇った一首である。もちろんここには誇張があるにせよ、

<sup>9</sup> 水野稔翻刻・解題『狂歌仁世物語』（浜田義一郎編『天文学』（東京堂出版、1979年、401—418頁）、鈴木俊幸「寛政期の鬼武」（『近世文芸』44号、1986年）41—48頁ほか。

<sup>10</sup> 高橋章則「『狂歌』に結実する地域の文化」（菊池和博編『講座東北の歴史』5巻、清文堂出版、2014年）309頁。なごらく序文から『名取の老』と呼ばれてきたが、『靈寿杖』の題簽は拙稿「山東京伝の地方読者へのまなざし」（『文学 隔月刊』17巻4号、2016年）133—136頁で報告した。

<sup>11</sup> 寛政12年版は茶梅亭文庫および牧野悟資氏蔵。

寛政末には奥州を含め、江戸狂歌の流行はすでにかんりの地理的拡がりを見せていたことがわかる。以後、狂歌は、一時は俳諧歌といった呼称もとりつつ、幕末に至るまで各地で楽しまれることになる。

## 二 和歌の規範の功

江戸狂歌では、連・側ごとにその主導者の考え方による程度の差こそあれ、基本的な作法は和歌に準拠していた。象徴的なのは酒月米人<sup>さかづきのこめんど</sup>という狂歌判者の編んだ作法書『増補狂歌題林抄』<sup>ぞうほきょうかだいりんしやう</sup>（文化2・1805年刊）である。この書名は、一条兼良の著を北村季吟が増補、出版して流布した『増補和歌題林抄』（宝永3・1706年刊）のもじりだが、それだけではない。初心者のために題ごとに名歌を集めたいわゆる類題集で、例とされる歌は狂歌だが、各題の題意の解説と言葉寄せ（用語集）の部分はほぼ原書に依拠している<sup>12</sup>。出版の9年後には再摺りされ、ほかに無刊記のものも含めて多くの伝本が残ることからかなり普及したと考えられる本で、どれほど江戸狂歌が和歌に規定されていたかをよく物語っている。江戸狂歌とは、そうした和歌の形式にもとづいて、そこになんらかのかたちで発想のおかしみや言葉遊びを盛りこむことで、「狂」となる短詩型文芸であった。

そうした和歌の規範はもともと京都の宮廷の発想で形成されたもので、その埒外にあった人びとの感覚にはそぐわない部分もあったことは「はじめに」に掲げた2首が示唆している。ただ一方では、地方の人びとの矜持を支える役割も担ったことにも目配りする必要があるだろう。それは和歌の世界で作りあげられた歌枕が全国各地に存在したことである。歌枕とは、端的にいえば和歌に詠まれてきた地名であり、それそのものはたふんに都びとが想像によって生みだした観念的なものにすぎなかったが、各地の実在の地名と結び付けられることによって名所を生む<sup>13</sup>。奥州はとりわけそうした歌枕の多い地で、近世にはその地の各藩が競って歌枕を領内の地名に比定した書物を編むという

<sup>12</sup> 本書については拙著『天明狂歌研究』（注6）3章5節「酒月米人小伝」で論じた（326—346頁）。

<sup>13</sup> 錦仁「歌枕と名所—和歌に包まれた国」（同編『日本人はなぜ五七五七七の歌を愛してきたのか』笠間書院、2016年）31—35頁。

事態が起こっていた<sup>14</sup>。

狂歌の世界でもさかんに歌枕が詠まれた。とはいえ、観念としての土地の名という元来の性格上、詠者の出身や居住地、実見の有無とは関係なしに修辞として詠じられることが多い。たとえば青陽館梅世編・北溪画『狂歌扶桑名所図会』（文政7・1824年刊）や芍薬亭ら編・柳川重信画『狂歌名所図会故郷の錦』（同9年刊）といった全国各地の歌枕を主題にする狂歌集でも、奥州を含め詠者の出身ないし居住地と地名に相関性はほぼ認められない。

それでも狂歌人たちが地元の歌枕を誇るようにして編んだ狂歌集が作られることはあった。奥州では、仙台の壺南楼山住が主催し、当地の判者浅籠庵細道に加え、江戸の千首楼堅丸・浅草庵市人の3人が評点をつけるかたちで狂歌合が開催され、その成果を編集した『狂歌みちのくぶり』（文化後半頃刊）がある<sup>15</sup>。仙台の狂歌人を中心としながらも、江戸をはじめ常陸・両毛などからも広く参加者を集めていた。とりあげられた陸奥の歌枕は、つぎのように高名なものから、あまり知られていないものまで50余を数える。

陸奥山 安積山 信夫山 磐手山 会津山 末松山 不忘山 物思山  
栗駒山 吾田多良嶺 名取川 同御湯 衣川 衣関 玉造川 野田玉川  
宮城野 安達原 玉田横野 栗原 葛松原 阿武松原 山榴岡 奥海  
塩釜 十府浦 松嶋 雄嶋 常盤島 都嶋 浮島 美豆小島 多故浦嶋  
籬嶋 松賀浦嶋 外浜 小鶴池 音無滝 緒絶橋 袖渡 稲葉渡  
佐波古御湯 興井 磐井里 奥牧 白川関 名古屋関 下紐関 押関  
蝦夷 壺碑 実方墓 武隈松 姉齒松 木下

奥州の歌枕に焦点化する狂歌集にはもう一つ、これも刊年は不明ながら天保期前後にその名が見える仙台の判者人千菊園<sup>16</sup>らの編にかかる『陸奥名所撮』

<sup>14</sup> 菊池勇夫「競いあう歌枕（名所） 仙台藩と盛岡藩の対抗」（『江戸』の人と身分5 覚醒する地域意識）吉川弘文館、2010年、80—106頁）、および錦仁「歌枕と名所—和歌に包まれた国」注（13）44—50頁。

<sup>15</sup> 壺号が使われるようになる文化六年以降（拙稿「北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の刊年をめぐる』『詩歌とイメージ』勉強出版、2013年）273頁、おそらく文化年中の刊。北斎門の蹄齋北馬の挿絵を付して、当初はおそらく催主の蔵版で出されたが（国立国会図書館・茶梅亭文庫蔵本など）、のちに各首の点数を削って鶴屋金助から発売されている（東京都立中央図書館加賀文庫本）。

<sup>16</sup> 天保期頃の狂歌人名録『諸家小伝録』に「千菊園」を名のる人物としていずれも仙台の緑千条・伊藤千条の両名が見いだせる（石川了『江戸狂歌壇史の研究』注8・667・685頁）。

も挙げられる。松島・宮城野・野田玉川・十府浦・末の松山の五つの当地の歌枕を描く各丁（無款）に、賛としてそれらを詠む狂歌を載せる。

いにしえより和歌に詠まれ続け、多くの歌人の憧れを誘ってきた土地が、身近にこれだけあるということ。それは奥州の狂歌人にとっても積極的に誇れることであつたのである。

### 三 陸奥の雪を詠む

歌枕が奥州の人びとの矜持を支える機能を果たしていたとはいえ、やはりあきらかに京都あるいは江戸とは異なる気候にあつた当地のこと、和歌の世界で育まれた季節感とは合わないところが出てくるのが想定される。ただ、和歌や狂歌では、歳時記によって月ごとに景物を定められていた俳諧ほどに厳密には季節を規定されなかったかもしれない。雪解けして、梅、そして桜が咲いたら春、藤のうつろいととも夏が訪れる、と自身のいる土地の四季の変化に即して詠ずれば、それがどの月ことでも構わないともいえる。あるいは目の前の景がどうあつても、狂歌合のたびに出された題に合った歌を詠めばよいのである。

そこで本稿で注目したいのは、京都や江戸周辺とはあきらかに異なる状況にあつたであろう北国の雪の詠みぶりである。北国の降雪量はいうまでもなく、さらにいえば温暖化した現代の冬よりもなおのことであつたろう。「雪」と聞いて想像する景はおのずと江戸の人びとのそれとは異なっていたに違いない。実際、当地の狂歌人に宛てておもしろい雪の歌への期待を綴る手紙を江戸の狂歌判者が書き送っていた。

それを保管していたのは、日光街道の先にのびて会津若松へとつづく会津西街道からさらに内陸に入ったところで狂歌を愛好した連中の中心人物、百中亭管高ひやくちゅうていはづだかであつた<sup>17</sup>。会津白沢の商人、羽染照方、通称を宗六郎といい、享和3（1803）年に生まれ、明治11（1878）年まで生きた人という。さきに触れた山陽堂の一枚摺が誇つたように全国を席卷した四方連（側）での活動が

<sup>17</sup> 高橋『江戸の転勤族』（注6）四章「会津の撰者百中亭管高の添削」221—226頁、『伊南村史』一通史編・近世（2011年）四章八節「狂歌」（高橋章則執筆）833—835頁。



知られている。この人の残した資料が現在その子孫にあたる大宅宗吉家にまると残されている。書簡も少なくないなか、とりわけ彼を直接指導していたらしい江戸の四方側の有力判者、秋長堂物梁しゅうちょうどうものやな（築）らの手簡を大量に綴じたつづりが複数ある。その秋長堂の手紙のなかに、つぎのような一節がみえる。

……月並之儀もはかへ敷も無之、最早当月限にて、例之通十月廿七日納会は例題雪の歌、是は御連中へも御すゝめ、御出詠を従今願上候。千條亭へもねぎ上候。（傍線は引用者、以下同）

千條亭も当地の狂歌人。年は不明ながら「菊月」つまり9月15日の日付をもつもので、翌月の狂歌合の題が例年通り雪の歌であることをわざわざ述べ、本人および周囲の狂歌連中に投稿するよう促している。判者たちは年初めに1年分の各月の題をそれぞれ複数かかげた一覧表を摺って配っているはずだが、あらためてあえて雪だけをとりあげてこの人びとの投稿を奨励したのであろう。また、10月3日付でこのように出詠を催促する手紙も出している。同じ27日メ切で同じ年のことかとも思うが、先の手紙には「例之通」とあったので別の年の可能性も否定できない。

当月納会のちらしは追便さし上可申候へ共、例年之通雪の歌、廿七日前（ママ）に是悲へ愛度御出詠可下、長足等其外御連へも御すゝめ可下候。

長足はさきの千條亭のことである。さらに同じ年のことかどうかは不明ながら、11月17日付で、つぎのように実際に彼らが書き送った雪の狂詠がメ切に間に合わずに判者合同の評価の対象にならなかったこと、残念ではあるがともかくこれから添削だけはして送る予定であることを述べる手紙も残る。

月並も御陰にて相続、納会目出度く賑やかにて大悦仕候。尊うし御連中雪の御歌は会后にまゐり候ゆへ衆評の間に合かね、乍残念野老引墨にてもいたし後便さし上可申候。

「うし」とは大人、狂歌人同士の敬称である。これは「老師三回忌の碑」云々という手紙と合綴されていることから、四方連の領袖鹿都部真顔しかつべのまがおの文政12（1829）年の没年に照らして、天保2（1831）年前後に書かれたと推測されるものである。またおそらく別の年、菊月6日付で「十月は愛度納会にて、雪は豊どしの貢もの、御出情被下、御連をも御すゝめ可下候」と雪豊年貢の題を詠んだ狂歌の応募を促す書簡もある。秋長堂がこれだけくり返しているこ

とからは、好奇心を刺激するような大胆な雪の歌を期待していることがうかがわれる。

また別の5月7日付の書簡では、秋長堂の喜寿の祝いに「殊に御祝物として白雪一ひら御祝被下、左に奉収納候」と記すものもある。この時期に実際の雪とも思えないので、なにか雪に見立てた品物、あるいは雪を表す絵や狂詠などを記した墨跡でも贈ったのであろうか。雪が彼ら会津の狂歌人たちを象徴するものに機能していた可能性をうかがわせる記述といえよう。17日の小田原町からの出火、西神田・小川町の焼失を伝えるこの書簡は、『武江年表』に照らして天保9年4月のものと判明する。



では、この期待に対して筈高がどのような狂歌を寄せたのか。それをみる前に、一般的な雪の詠み方を確認しておこう。酒月米人『増補狂歌題林抄』冬の部より本意の説明を引用する。先述のとおり、一条兼良原撰、北村季吟増補『増補和歌題林抄』のほぼ丸取りだが、今そのことは措いておく。

木ずゑの雪は花にまがへ、夜の庭をば月かとおほめき、山ざとは雪にとぢられて、谷の細道人もかよはず、をのづからとひ来るころろざしをあはれみ、跡つけまうき庭の雪なれどなを人のとふはうれしく、雪のうはぶきかはらねば、あれたるやどもみえわかず、まがきの竹の雪の下をれの音にめをさまし、松のしづえもおれふして庭につき、越路の庵には軒かくるゝばかりつもることをいとひ、みちにまどひて駒をはなちてあとをたづね、谷のかけ橋むもれて嶺よりかよひ、旅寝の宿に雪の下ふしをなげき、賤の男がつま木も雪つもりてをもく、山里のまがきの戸ほそも雪にとぢられてあくる事もしらず。夜のまども雪をあつめてふみをよめる心などをよむ。

山里は雪に閉ざされ、雪に覆われて田舎の荒れた家もどこにあるか見分けがつかないほどで、雪に竹も下折れし、松の枝も折れて地面に着く。「越路」の豪雪には軒や道も隠れ谷の架け橋までも雪に埋もれて山の峰に連なる、云々。観念的ながらも、大雪の景をそれなりにとらえているといえる。



では筈高らはどう詠んだのか。自詠集『まゆみの紅葉』（写、年不明）から

雪の歌を拾いあげてみよう。

### 山家雪

中垣は埋れはて、山ざとの遠き隣も雪にちかみち

これはさきの『狂歌題林抄』にもいう、軒も何もかもが雪に埋もれているというのと、景色としては同じかもしれない。とはいえ、離れた隣家まで間がずっと雪に埋まって近道になるとは、体験した者にしかわからない楽しい感覚ではないか。つぎの詠も同様であろう。

### 遠近

つもりては遠の高ねも我庭の籬の山につゞくしら雪

これも『狂歌題林抄』の「谷のかけ橋むもれて嶺よりかよひ」と似た発想ながら（これは『和歌題林抄』の証歌とされる源俊頼「ふる雪にたにのかけ橋うづもれてこずゑぞ冬の山路なりける」によっていよう）、遠くの山と吊り橋を眺めるどこか他人事めいた視点と、視界を覆いつくした雪に導かれて彼方の高嶺からすぐ目の前の庭までを眺める詠者の視点はあきらかに異なっている。これは別の天保5年投稿を綴った写本にもみられる一首で、時期が特定できる。

さらに、あたり一面を埋めつくした雪は、『狂歌題林抄』に説明される伝統的な題意を超えて、さりげなく新たな発想を生んでいた。

### 眺望

遠山の松にぞしばしやすめける見るたび目さへ雪につかれて

白い輝きがあまりにまぶしく、所どころに覗く松の木で目が休まるというのは、雪晴れの光の強さ、雪に覆われたなかにもところどころ松の高い枝が飛びだしているさまを知る者だけにしか詠めない景ではないか。伝統的な美意識に即して雪の美を愛でるのではなく、目が疲れると率直に詠むことでおかしみを醸しだそうというのだろうが、その輝きが印象的な一首になっている。つぎに、やはり雪の光の強さを詠む同じ題の歌を2首掲げる。

### 朝雪

面白き雪にけしきを奪れて見るもの黒き冬のあけぼの明仄

時をえて烏ぞ今朝は目立ける白きばかりの雪の曙

1首めは朝の陽に照らされた雪のあまりのまばゆさに目がくらんで、あらゆるものが影になって見えることを詠む。たびたび体験している身にとっては少し

おかしみを感じる現象としてこのように狂歌にしたたのであろう。初句でさりげなく『徒然草』31段の冒頭「雪のおもしろ降りたりし朝」を匂わせつつ、銀世界のまばゆさのなかでものが黒く見えるという感覚を詠むのは、そうした光景になじみのない者にとってはむしろ新鮮に映る。2首めは雪中にひときわ黒く存在感を見せるカラスを詠う。日頃目立たないこの鳥も、一面の白地の上でこそ映えるというもの。カラスの晴れ舞台という発想のおかしみはともかく黒白の対比は単純な着想で「目立ける」という表現も直截な素朴な歌だが、前の詠に照らすと、やはりこれも実景に基づいた一首なのであろう。

これらの歌は、新たな美意識を追及する和歌ではなく、あくまでも笑いを志した狂歌ではある。それでも歌として雪国ならではの新鮮な詩想をすくいあげた珍しい詠といえないであろうか。

『狂歌題林抄』は例となる狂詠を挙げていないが、代わりに『和歌題林抄』の掲げる証歌に一面の白雪の光を詠むものがないか探ると、辛うじて次の一首を見いだすことができる。

#### 雪中眺望

うづもれし松竹ながら夕日かげさすがわかるる雪のやまもと 実隆

『雪玉集』巻5に収められる歌(3518)である。夕陽の光が「さすがわかるる」というのは光線がさまざまに反射することをいうのだろうか。解釈の難しいなじみのない表現は目新しくはあるが、強い輝きは感じられない。あるいは月の光と比べる詠もある。

#### 遠嶺雪

峰たかみ雪のひかりも月影もおなじ雲間に明ほのの空 堯孝

『仙洞歌合』66番歌で、雪月花のうちの2者が空の高いところで並ぶさまを称する。曙の淡く白んだ月とくらべられる雪の光もやはりやわらかいものであろう。これらに照らしても、筈高が素朴なことばで歌いあげた、視界を覆いつくす白雪の鮮烈な光は、少なくともこうして版本として世に流布した作法書として知られた範囲では、和歌の世界にはない表現であったとみてよいのではないか。同じく近世に広く普及した有賀長伯『初学和歌式』(元禄9・1696年刊)の雪の項目も、光に言及するのは「夜の雪は月影にまがへ」という程度であった。

はじめに掲げた歌稿を残した白河の秋風関住も、同郷の判者雪木庵宿成が編んだ『狂歌千年集』(文化3年刊)に<sup>18</sup>、「冬旅」の題詠でつぎの一首を寄せていた。

うば玉の夜行道も灯火のあかしはけしていらぬしら雪 秋風

夜道でも雪明かりで提灯も要らないという、明るさをやや誇張ぎみに詠むおかしみが評価されて入集したのであろうか。これも雪の光の強さを主眼にすえた奥州人の発想であった。

## おわりに

会津白沢の狂歌判者百中亭筈高は、江戸の宗匠秋長堂からの期待に応えるように、従来の和歌、また狂歌にもなかった銀色にかがやく雪の強い光の世界を歌にしていた。わずかな例ではあるが、みちのくの狂歌人たちが伝統的な和歌の美意識にはない境地を切り開いていたことがいま見える。

ふたたび白河の秋風関住の狂歌投稿綴に目を向けてみると、墨付全36丁に雪の詠4首を記している。そのうちには単純な発想ながらこんな愉快な一首もみえる。

いたづらに達磨作れば大雪にこちらの尻のくさるをかしさ

一緒に綴じられている別の投稿先に送った一丁では初句を「うない子の」としている。そこからすると大雪で子どもたちは雪だるまを作って楽しんでいますが、すべてが埋もれた世界では大人は出かけることもままならず、面壁九年の達磨大師のように自身も尻が腐ってしまうというのである。これも滑稽に包んで当地の生活感覚を詠んだものといえるであろう。それぞれ9点、7点を得たとの記録、これも江戸の判者らの評価は高くなかったようである。

とはいえ、みちのくの狂歌人たちは、和歌の規範を活かすかたちで歌枕を誇り、その制約を超えて狂歌らしい発想の自由さで、その地を生きる者の視点をさりげなく織り込んでいた。それは狂歌という自由な発想を許す形式によって可能になったことであつたらう。

中央の狂歌判者たちからの評価もさることながら、今日の研究においてもこの時代の狂詠が歌としてまともに論じられることはほとんどない。しかし、

<sup>18</sup> 宿成については高橋章則「『狂歌』に結実する地域の文化」(注10)に詳しい。

これら北方の狂歌人たちは、江戸や上方で作られた規範を措いて、このように別の角度から掬いあげることが可能になる狂歌もまだまだある可能性を示唆してくれていた。

[付記] 本稿に関連する資料の調査にあたって、福島県南会津町教育委員会奥会津文化財等研究員河原田宗興氏に多大なる便宜をお図りいただきました。記して感謝申し上げます。

&lt;ABSTRACT&gt;

## Composing Poems of Snow beyond the Norms: Seasonal Expressions by *kyôka* poets from the North

KOBAYASHI Fumiko

*Kyôka*, literally ‘mad verse’, a genre of poetry comprised of thirty one syllables as well as traditional *waka* than the latter, was one of the most widely enjoyed genres of poetry in the century Japan. Countless numbers of amateur poets from all over the country got groups together to enjoy composing verses and joining contests monthly held by many masters. Ôshû province (present Fukushima, Miyagi, Iwate and Aomori prefectures) was one of the most outstanding regions in terms of the numbers of active poets and groups in the genre.

They composed *kyôka* verses according to the norms formed in the *waka* tradition as a derivative genre from that. Those rules or conventions depended on the sense of the people in the capital (now Kyoto), which was not far from the one of those in Edo(Tokyo). The situation for the people in the northern Japan, however, was very different.

The amount of snow was the most typical aspect of the differences in climate as we can easily imagine, and actually a *kyôka* master in Edo named Shûchôdô Monoyana had sent letters to his student, Hyakuchûtei Hazutaka in Aizu district, west Ôshû, expecting him to send poems of snow above all. In fact, Hazutaka left poems of snow in his notebooks including some with a remarkable concept: the strong shine of snow which had never mentioned to in the traditions of *waka*.

*Kyôka* works by obscure poets like him are hardly paid attention to now, however, he seems to have suggested the possibilities that *kyôka* might have

broken new grounds of expressions in the world of thirty-one syllables with the power of unsophisticated, naïve poets in provinces.